



槇野はステップスギャラリーの2015年6月「批評家展」などのグループ展にも参加しているが、個展は2011年10月、2013年9月以来、三度目を数える。1回目は日用品を、2回目は「家」を展示した。槇野は今回、新作を単独で展示するのではなく、それぞれの「状況」と共に見せる、いわゆるインスタレーションの技法で作品を発表した。出展作品は新作5点、旧作14点である。新作《アクリル絵具》、《デパートの紙袋》、《沖縄のアイス》、《落とし物の消しゴム》、《ヨシオカさんの目薬》夫々に簡単な解説が付けられているがここでは《デパートの紙袋》を引用する。「銀座へ来て、「せっかくだから何か買って帰りたいな。」とってしまうわけです。この日はお惣菜を買ってみました。」インスタレーションの技法といっても、平台に《デパートの紙袋》、《沖縄のアイス》のスプーンの袋が載り、床に《ヨシオカさんの目薬》があり、脚立に《アクリル絵具》が置かれ、足元に《落とし物の消しゴム》が転がるに過ぎない。しかしこの点在的でさめざめとしたインスタレーションが互いに干渉することなく中心を生み出さないのが良い。《デパートの紙袋》以外、実物同様、作品が余りにも小さすぎて探すのが大変である点にも注目したい。

敗戦後すぐ、これからの美術を探る動向の中で、国立近代美術館「抽象と幻想展」に際して座談会が開かれた記録が「美術批評」1954年2月号に残されている。参加者は小山田二郎、駒井哲郎、斉藤義重、鶴岡政男、杉山直。日本の敗戦後美術は「向こうの影響」(鶴岡)から逃れられず「ヨーロッパ的な眼(斉藤)ではないことが議論となる。そこで鶴岡が「日本の絵というものは、全体的に物を描かないと思うのだよ。物を...。事を描いていると思うのだ。事は物でもって表現されなければならないのに、物を忘れて事を描こうとしている」(傍点を省略)と指摘する。議論はその後日本の「精神性」に移行し、抽象と幻想、美と醜の問題へ移行して終わる。槇野の新作は、ただ展示する「物」からインスタレーション的に「事」へと変化した。すると、「物」が前提になって「事」へ移っていったのだから、鶴岡の指摘を凌駕したことになる。同時に槇野の作品は日本的な繊細さを持ちながらも、精神性を全面に押し出していない。それよりもむしろ、槇野の作成する「商品」は工業製品というよりも「日用品」である。襖絵や屏風も嘗ては美術品ではなく日用品であった。そのような「精神」を槇野は引き受けている。

